

# まちづくり担い手育成事業における 学習プロセスに関する研究 —松山アーバンデザインスクールの試み—

小川 直史<sup>1</sup>・羽鳥 剛史<sup>2</sup>・尾崎 信<sup>3</sup>・片岡 由香<sup>4</sup>

<sup>1</sup>非会員 株式会社地域計画建築研究所 地域再生デザイングループ（〒600-8007 京都市下京区四条通り  
高倉西入ル立売西町82）

E-mail:ogaw-no@arpak.co.jp

<sup>2</sup>正会員 愛媛大学准教授 社会共創学部環境デザイン学科（〒790-8577 愛媛県松山市道後樋又10-13）

E-mail:hatori@cee.chime-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 愛媛大学講師 防災情報研究センター（〒790-8577 愛媛県松山市道後樋又10-13）

E-mail:osaki.shin.ee@chime-u.ac.jp

<sup>4</sup>正会員 愛媛大学准教授 社会共創学部環境デザイン学科（〒790-8577 愛媛県松山市道後樋又10-13）

E-mail:kataoka.yuka.kq@chime-u.ac.jp

本研究は、まちづくりの担い手育成事業における受講生の学びのプロセスとそれを通して形成される理想の担い手像の解明を目指した。地域社会の存立を維持し、市民主体のまちづくりを展開していく上で、まちづくりの担い手を育成することは地域における喫緊の課題である。自治体等により、まちづくりの担い手の育成を目指して「まちづくり学習」を実施する事例が増えつつあるものの、受講生がどのようにまちづくりについて学び、担い手として成長していくかについては明らかではない。そこで、愛媛県松山市において平成26年より取り組まれている「まちづくり担い手育成事業（アーバンデザインスクール）」を対象に事例調査を行い、受講生の学びのプロセスモデルを作成した。また、受講生へのヒアリング内容のテキスト分析より、複数のまちづくりの担い手像を抽出した。その上で、学びのプロセスと担い手像との関連性を検討し、それぞれの担い手像の形成において特徴的な学びを考察した。

**Key Words** : regional learning process, educational program of town planning leader, urban design school, un Autre intérieur, grounded theory approach

## 1. はじめに

### (1) まちづくりの担い手育成の取組

近年、中心市街地の活性化をはじめ、地域社会が抱える諸課題を解決する上で、市民の主体的な参画による「まちづくり」が重要な役割を担っている。まちづくり活動を推進するための条件として、仲間づくり、活動資金の確保、地元との関係形成、行政の支援等、様々な条件が挙げられるが、その中でもまちづくり活動を主体的に進めていく「人材」が最も根本的な条件と言っても過言ではないであろう<sup>1)</sup>。まちづくりを進める上では、まちの課題発見やその解決に向けた企画構想、企画に取り組む熱意やリーダー・シップ、関係者間の連携・調整をはじめ、様々な資質が問われる。近年の地方消滅論をはじめ、地域衰退に関する議論が真実味を帯びつつある中、

地域社会の存立を維持していく上では、こうした資質を備えたまちづくりの担い手をいかにして育成するかが重要な課題である。

こうした背景の下、現在、自治体、NPO等の民間団体、大学等の教育機関により、まちづくりの担い手の育成を目指して、「まちづくり学習」を実施する事例が増えつつある。例えば、小学校において、まち探検やデザインゲーム等の体験的な学習を通じて、子ども達のまちへの関心や愛着意識の醸成を目指す様々な取り組みが行われている<sup>2)</sup>。さらに、自治体や大学等が中心となって、一般市民を対象にまちづくりを牽引するリーダーやコーディネーターを養成するための市民講座を主催する取り組みも進められている<sup>3)</sup>。国土交通省の全国調査<sup>4)</sup>によれば、2005年時点において、まちづくりリーダーの養成講座等、地域づくりに関わる人材育成の取り組みを行っているのは、市町村では11.3%、まちづくり協議会等の

組織では15.7%, 大学では57.8%であった。この調査以後10年余りが経過し、近年では地方創生の機運も高まっていることから、地域づくりやまちづくりの担い手育成事業の取り組み事例は全国的に増加していると推察される。

## 2. 既往研究

### (1) まちづくり学習の課題

都市計画学や土木教育の分野において、まちづくり学習に関する様々な研究が蓄積されている。「まちづくり学習」の定義は様々であるが、例えば、安藤<sup>7)</sup>は「“環境”のための学習であり、主な目的はまちづくりを自らの問題として捉え、関わってゆこうとする主体意識の育成と、そのために自らの“環境”を自分で判断するための価値観の育成である」と定義している。また、梶島・梅澤<sup>8)</sup>は、子どものまちづくり学習に関する研究において、「子どもの生活する環境、とりわけ身近な地域を対象とし、まち・地域のもつ多様な側面を包括的に生かしながら、人間と環境との関係のありようを学ぶことを通して、自らの住むまち・地域に対する関心・愛着を高め、環境に対する感性を養い、まちの仕組みや環境の豊かさなどについての基礎的な知識を得るとともに、まちや暮らし方についての豊かなイメージを育み、まちづくりにかかわっていく意欲や態度の基礎的な力を培うことを目的とする学習」と包括的に定義している。これらの定義に共通する様に、まちづくり学習において、学び手が当事者としてまちや地域の問題に関わりを持つ主体性を育むことが重要視されている。さらに、学び手の主体性を育む上でも、現実のまちづくり活動の実践経験を重ねることが重要であると指摘されている<sup>9)</sup>。学び手は、地域社会の中で自分達のまちづくり企画を実践する中でこそ、まちづくりの面白さや難しさを実感すると共に、まちづくりを進めていくための実践的な能力や技能を身に付けることが期待できる。

まちづくり学習に関わる事例研究より、まちづくり学習の実施状況や課題等の実態調査<sup>10) 11)</sup>や学習効果の検証等<sup>12) 13)</sup>が行われている。また、効果的な教材やプログラム開発も行われており、講義形式だけでなく、ワークショップやまち歩きを取り入れたもの等、様々なプログラムが提案されている<sup>14) 15) 16) 17) 18)</sup>。ただし、既存研究の取り組み事例では、まちづくりの企画立案に留まるものが多く、実際に参加者自身がまちづくり活動に参画する段階まで組み込んだ実践的なプログラムは少ない。そのため、従来の研究では、学び手がまちづくりの実践活動に参加する中で、「いかにしてまちづくりについて学んでいくのか」という実践的な学習プロセスについては十分に検討されていない。

### (2) まちづくり人材の育成における視点

2007年に、日本都市計画学会により、都市計画を担う人材を育成する教育分野の変化の実態把握を目的として、大学等高等教育機関へ実施された調査<sup>19)</sup>において、大学等の都市計画・まちづくり分野に所属する学生を育成する際の資質や素養・技術の視点を、以下のように4つに類型化している。1点目は、地域の特性や資源、課題を的確にとらえることのできる能力。2点目は、幅広く多面的な点から事象をとらえることができる能力。3点目は、住民参画などの場面でファシリテート、コーディネートできる能力。4点目は、議論をしたり、話を聞いたりしながら、コミュニケーションができる能力である。また、小杉<sup>20)</sup>は、まちづくりの初学者が学んでいく、まちづくり専門家に求められる基本的資質について、以下の4点を挙げている。1点目は、客観的視点に加え、主観的視点をもとにまちの特性を探求していく姿勢。2点目は、住民との信頼関係を築けるコミュニケーション能力。3点目は、他の事例を自ら評価し、それを自ら構想に反映させていく創造力。4点目は、慎重な活動計画をもとに、積極的に状況に介入していく姿勢である。これらの報告により、まちづくりの学び手に対して、地域の特性を主観的・客観的に把握し、地域住民やまちづくりの関係者と丁寧にコミュニケーションをとることができる能力が重要視されていることが伺える。また、小杉はその上で、まちづくり専門家においては、まちづくりに積極的に介入していく姿勢が求められていることを指摘している。小杉はこの視点の根拠として、実施したプログラム終了後に、受講生が自主的に地域のまちづくり活動へ参画していったことを挙げている。当該プログラムは、対象地域の計画提案を目指したものであり、地域住民へのヒアリングや提案に対する地域住民との意見交換をプログラムに組み込んでいる。地域住民との交流過程を経て提案を形にする中で求められる資質であり、受講生が地域社会に介入し、まちづくり活動を実践していく上で求められる資質については検討されていない。

### (3) 学びに関する理論的背景

心理学の伝統的な考え方によると、学習とは経験の反復による比較的永続的な行動の変容<sup>21)</sup>と定義され、教師をはじめ他者からの指導により、学習者が受動的に知識やスキルを獲得することを前提としている<sup>22)</sup>。このような伝統的な学習観に対して、認知心理学の分野における状況的学習論 (situated learning theory) は、「学習」が具体的な社会状況に埋め込まれた実践の中で成立することを強調する<sup>23)</sup>。特に、Lave & Wenger<sup>24)</sup>の正統的周辺参加論 (Legitimate Peripheral Participation: LPP) によれば、「学習」は、実践を共有する成員の集まりである「実践共同体」への参加として捉えられる。学習者は、社会的・文

表-1 UDSM4 期生基礎編授業スケジュール

化的な実践活動への周動的な参加から始まり、次第に中心的な役割が求められる十全的な参加に移行する中で、実践共同体の成員としてのアイデンティティを形成するものとされる。さらに佐伯<sup>2)</sup>は、こうした議論を踏まえた上で、「学び」という営みを、「文化的な所産を“創り出す”人々の営みに、自らも“創り出す”立場で、いわば生成的に関係をつくっていくこと」と幅広く捉えている。また、佐伯は学びにおいて、トマセロの文化的学習論を踏まえて、ワロンの自我発達理論における「第二の自我」が重要であると述べている。第二の自我とは、自己自身の感受性の内部に、「他者」という自分とはべつのもに“なってみる”ことのできる「もう1人の自分」や学ぶことでつくられることが期待される「本当の自分」であるとされる。例えば、企業の新入社員が、仕事を熟達していく中で、なりたいて考えているエリート社員になってみた自分（第二の自我）を想定することにより、学びが促進されることである。

以上より、まちづくりの学び手が、まちづくりを実践する上で地域に参加し地域の課題解決や魅力創出に関する活動を実践的に創り出していく過程で、「まちづくりの担い手」に“なってみる”ことにより、まちづくりを学んでいくと考えることができる。

#### (4) 本研究の目的

まちづくりの担い手育成事業の受講生が、まちづくりの担い手に“なってみる”ことにより、地域での実践を通じて、どのようにまちづくりについて学んでいくのかというプロセスを明らかにすると共に、その過程を通じて、第二の自我としてどのようなまちづくりの担い手像を形成したのかを明らかにすることを目的とする。

### 3. 調査方法・分析方法

#### (1) 松山アーバンデザインスクールの取り組み

本研究では、まちづくりの実践過程を組み込んだ担い手育成事業として、愛媛県松山市の「松山アーバンデザインスクール」を取り上げる。愛媛県松山市では、平成 26 年 4 月より、公民学連携のまちづくり推進組織として松山アーバンデザインセンター（Urban Design Center Matsuyama: 以下、UDCM）が発足している。「松山アーバンデザインスクール（Urban Design School Matsuyama: 以下、UDSM）」は、本センターによるまちづくり担い手育成事業として開設された。松山市内の 4 大学（愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学）の教員が運営委員会を組織し、カリキュラムの設計や運営を担っている。

本稿が対象とする UDSM の第 4 期は、2018 年 5 月から 2018 年 12 月にかけて実施され、基礎編と実践編によ

授業回 (日程) 受講者数 (内訳)	授業内容
Day. 1 (2018/5/12) 受講者数: 50 名 (社会人 8 名, 学生 42 名)	ガイダンス ・ UDSM4 期生基礎編主旨説明
	まちづくりレクチャー 「松山市中心部のまちづくりとまちの成り立ち」
	まちづくりレクチャー 「もし大学教員がまちあるきをしたら」 ・ 景観、マーケティング、交通、猫、まちづくりの観点から、教員がまちあるきの方法を紹介
	ちあるき ・ 1人3つの課題を与えられ、松山市中心部を3時間かけて探索
Day. 2 (2018/5/13) 受講者数: 52 名 (社会人 9 名, 学生 43 名)	まちづくりワークショップ 「まちあるき結果の共有・整理」 ・ 1日目に実施したまちあるきを、写真と説明をもとに共有 ・ 地域の魅力、課題等の観点から分類
	UDSMOB・OG活動紹介 ・ UDSM3 期生までに実施された「椿のおもてなし」「かやまちクラブ」「まつトラムラリー」の活動内容を紹介
	まちづくりレクチャー 「絵本から学ぶまちづくり」
	まちづくりレクチャー 「マーケティングの視点からみるまちづくり」
	松山市取り組み紹介
	UDCM 取り組み紹介
まちづくりレクチャー 「まちづくりを『学ぶ』ということ」	

表-2 UDSM4 期生実践編授業スケジュール

授業回 (日程)	授業内容
第 1 回 (2018/5/25)	ガイダンス ・ UDSM4 期生基礎編主旨説明 まちづくりレクチャー 「地域の課題発見・解決に向けて」 テーマ決めワークショップ ・ 各受講生が取り組んでみたいまちづくりについて発表
第 2 回 (2018/5/31)	テーマ決めワークショップ ・ 受講生同士が取り組んでみたいまちづくりについて話し合い、近いテーマや共感できるテーマ同士がグループを結成
第 3 回 (2018/7/6)	天候不良により延期。後日数グループ毎で進捗共有。
第 4-10 回 (2018/8/1,9,9/5,10,9/24,11/6,20)	プロジェクト進捗状況報告
第 11 回 (2018/12/4)	最終報告会準備
第 12 回 (2018/12/8)	最終報告会 ・ 地域住民へ向けてまちづくりプロジェクトの成果報告

り構成されている。



表-3 UDSM4 期生が取り組んだプロジェクト

No.	プロジェクト名 (メンバー構成)	プロジェクト概要	実施日
1	イトコ道後 (8)(11)(18)(23)	道後地区内の上人坂とその坂上部に位置する宝厳寺に着目し、宝厳寺内に仮設的にベンチを設置し、夕焼け鑑賞と道後地区の歴史を発信することを目的としてツアーを実施。	11/39,16, 17,23,24
2	井野森隼太郎 (1)(3)(12)(22)(26)	松山市中心部に位置する城山公園から見える星空に着目した。癒しをテーマに、飲食店の出店を依頼し、星空鑑賞を行うイベントを実施。	11/3,30
3	エキカツ (2)(7)(13)(19)(21)(28)	JR 松山駅での待ち時間の長さに着目し、待ち時間に利用できる JR 松山駅周辺の飲食店を記載したマップの製作・配布を実施。	2019年2月下旬
4	街を照らし隊 (9)(10)(17)(27)	松山市中心商店街の南側に位置する柳井町商店街に着目し、夜間帯において、商店街や店舗内を灯籠等によりライトアップを実施。	12/20-22
5	松山アートプロジェクト (4)(15)(16)(24)(25)	松山の代表的な文化である俳句に着目した。季節感の感じられる 4 句の俳句を選び、4 種のスープを用意し、どのスープがどの俳句を表しているか考えながら楽しむイベント実施。	11/18
6	Washi Sky Project (5)(6)(14)(20)	愛媛県の伝統的な特産品である大洲和紙に着目し、松山市中心部に位置する花園町通りにおいて、大洲和紙を地面から高さ 3m ほどのところに屋根状に展示するイベントを実施。	11/24,122

基礎編においては、5月12日、13日の2日間において開催され、受講条件を設けず1日目は50名（社会人8名、学生42名）、2日目は52名（社会人9名、学生43名）の参加があった。まちづくりの基本的な考え方や松山市の取り組み紹介、UDCMの取り組み紹介、まちあるきの実施がなされた（基礎編のスケジュールについては表-1に示す）。

実践編においては、受講者数を30名と設定し、学生の受講希望者に対しては選抜試験を実施した。選抜方法として、受講理由と実践編を通して取り組みたいまちづくり活動についての小論文を課した。その結果、社会人5名、学生26名が受講生として選抜された。実践編のスケジュールを表-2に示す。第1回授業において、まちづくり活動の事例を交え、まちづくり活動を進める上での方法や心構えに関する授業を行い、その後受講生がそれぞれ取り組みたいまちづくり活動を発表した。第2回授業において、受講生はお互いに取り組みたいまちづくり活動が近いテーマや共感できるテーマ同士がグループとなり、第2回授業以降、更に具体的な企画になるよう検討を重ねた。その結果、表-3に示す6つの企画が立ち上がり、UDSMの教員が各グループを1人ずつ担当した。第3回授業から第10回授業にかけて、受講生は活動の進捗状況を報告し、担当外の教員や他チームの受講生から指摘や助言を得る機会をつくった。実践途中に諸般の事情により3名が途中で受講をとりやめ、まちづくり活動は28名（社会人3名、大学生25名）で進められた。受講生は授業時間外において、実際に地域住民や商工団体、NPO団体などのまちづくり団体、地元企業などの

連携・協力を得て、企画しているまちづくり活動を実践へと結びつけていくことを目指した。第12回授業として、地域住民や行政、大学関係者ら約50名を集めて、実施したまちづくり活動についてのプレゼンテーションをおこなう最終報告会を実施し、UDSMの第4期を終了した。

## (2) 調査方法

UDSM受講を通してどのような学びのプロセスを経たのかを把握するため、2つの調査を実施した。まず、受講生全員を対象に、授業中止となった第3回授業と最終報告会である第12回授業以外の授業後に、授業時の感想・気づきを記入してもらった感想シート調査を実施した。全10回の調査を通して、計179名の有効回答を得た。次に、振り返りワークショップ（以下、WS）による調査を実施した。WSにおいては、UDSM基礎編、実践編を通して、どのような経験をし、その経験からどのような学びを得たのかを振り返ってもらった。WSは、2018年12月15日10時～12時で実施し、11名の参加があった。参加していない受講生は、後日筆者の研究室に来てもらうかメールでの返信により、WSの内容を踏まえたワークシート記入を依頼し、25名（社会人1名、大学生24名）から有効回答が得られた。

また、受講生がUDSM受講を通してどのような第二の自我を形成したのかを把握するために、UDSM受講前後においてアンケート調査を実施した。事前アンケート調査は、基礎編受講前の2018年5月7日にアンケートを配布し、基礎編1日目の2018年5月12日にアンケートを回収し、

20名（社会人2名，大学生18名）の有効回答を得た。事後アンケート調査は、WS時に配布，回収し，不参加の受講生はWSのワークシート記入と同様に，筆者の研究室に来てもらうかメールでの返信を依頼し，25名（社会人1名，大学生24名）から有効回答が得られた。事前，事後アンケートは同様の内容とし，受講生自身が理想とするまちづくりの担い手像について，「あなたにとって，理想の『まちづくりの担い手』とはどのような人物ですか？以下に，自由にご記述ください。」という設問をA4サイズの用紙にて尋ねている。

この調査により回答された，理想のまちづくりの担い手像を，本研究ではまちづくり活動における第二の自我と定義する。

### (3) 分析方法

UDSM受講を通して，どのような学びのプロセスを経たのかについて，感想シート調査とWSでの記入内容を分析するにあたり，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: 以下，GTA）の手法を採用した。GTAとは，データを基にして分析を進め，単なるデータの要約にとどまらず，データの中に出てきた現象がどのようなメカニズムで生じているのかを示す『理論』を算出しようとする研究方法である<sup>26)</sup>。まちづくりの学びのプロセスを検討するにあたり，単に時系列に学びの内容をまとめるのではなく，まちづくり活動に係る様々な活動やメンバー同士での相互作用など，学びが生じる要因についても把握するためにはGTAによる分析が最適であると考えた。GTAに手法はStrauss& Corbinにより考案され，創始者それぞれにより発展されたStrauss版，Glaser版，Strauss& Corbin版，それらをさらに発展させた戈木クレイグヒル版<sup>27)</sup>，データの切り離しを排し，より文脈を捉えるよう修正された修正版GTA<sup>28) 29)</sup>など，具体的な分析手順により様々なパターンが提案されている。本研究においては，相互作用によって生じる変化において，なるべくたくさんのプロセスを捉え，ある現象を形作る多様なメカニズムを，分析者のバイアスを極力減らすように開発された戈木クレイグヒル版を参考にしている。

GTAは，いったんデータを文脈から切り離してラベル名をつけたあとで，それらをまとめ直してカテゴリーを見出し，カテゴリー同士の関係を検討することにより，理論を算出しようとする方法である。分析は，3つのコーディング（オープン・コーディング，アキシヤル・コーディング，セレクトティブ・コーディング）で構成されている。

オープン・コーディングにおいては，感想シートとWSにより得られたデータを読み込み，データが十分に理解できたら，一文毎を基本に内容毎の切片にして切り

離した。切り離したデータから，プロパティとディメンションを抽出し，それらをもとにしてラベル名をつけた。プロパティは，そのデータの特性を示す分析者の視点である。ディメンションは，プロパティの次元であり，プロパティから見たときの位置づけ，範囲を示すものである。ラベル名を付けたら，もとの切片データと一文毎に切り離す前のテキストデータに照らし，そのラベル名でよいのかを確認した。次に，時間（学習の順序）的近さや，意味の近さに留意し，それぞれのラベル名を集めてカテゴリー名をつけた。カテゴリー名をもとに，プロパティとディメンションを適切な表現に変更し，カテゴリー名から考えて必要なプロパティがあれば追加し，テキストデータに戻って対応するディメンションを探した。この作業を受講者28名一人ずつ行った。

アキシヤル・コーディングにおいては，各カテゴリーをプロパティとディメンションを使って関連付けたカテゴリー関連図を作成した。この作業を受講生28名一人ずつ行い，28名分の学びのプロセス図を作成した。その後，各グループのメンバーのカテゴリー関連図を作成した。各グループのカテゴリー関連図を作成することにより，感想シートとWSによるデータにおいて論理性に欠ける記述や飛躍した記述に関して，学びのプロセスを補完することが可能となった。また，時系列の順序が曖昧な部分に関しては，UDSの授業内で実施された進捗報告における資料を参考にし，極力曖昧な部分を排した。

セレクトティブ・コーディングにおいては，グループ毎に作成したカテゴリー関連図を統合させ，カテゴリー関連統合図（学びのプロセスモデル）を作成した。

UDS受講を通して，第二の自我としての「理想のまちづくりの担い手像」がどのように変化したのかを把握する為に，事前事後アンケートで得られたテキストデータを，できる限り客観的で信頼できる方法によって代表的な意見を抽出することを目指し，KH Coderにより，テキスト分析をおこなった。KH Coderとは，テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェアである<sup>6)</sup>。KH Coderに内包されているプログラムソフトRの機能を利用した階層クラスタ分析を，4回以上出現した単語を対象におこない，10つのクラスタに分類した。そのうちアンケートの題意にまつわるクラスタは排し，計8つのクラスタを作成した。その上で，UDS受講による学びを学びのプロセスモデルからそれぞれ変数化し，事後アンケートによる理想の担い手像と対応させ，どのような学びがどのような第二の自我（理想の担い手像）を形成する傾向にあるのかを分析した。ここでは，ディメンションを基準に，「0」または「1」の数値を用いた。例えば，【グループ活動】の中で，＜合意形成の難しさ＞に言及している場合は「1」，特にそういった記述が見られなかった場合は「0」としている。

## 4. 分析結果

### (1) 学びのプロセスモデル

GTAにより、導出した受講生の学びの16のカテゴリーと78のプロパティを表4に示す。学びのプロセスモデルとしてのカテゴリー関連統合図を図-1に示す。それらのカテゴリーを時系列で「導入期」、「プロジェクト胎動期」、「プロジェクト実践期」、「プロジェクト振り返り期」の3つの過程に大別し、以下では過程ごとに説明する。

#### (a) 導入期

導入期は、UDSMを受講し、レクチャーやWSを通して、まちづくりの視点を獲得していく期間である。

UDSMを受講するにあたり、<まちづくり活動の体験>をしていることや<地元が好き>、<地元の衰退>を感じているという【過去の経験】から、【参加動機】へとつながっていた。

【参加動機】としては、<まちづくりにまつわる仕事への興味>や<松山のためになる活動への意欲>、<まちづくりの学びへの意欲>、<松山に対する関心>、<他分野の人との交流>への期待が見受けられた。

その後、まちづくりに関するレクチャーやまちあるきを通して、<まちの見方>や<他者の視点>、<松山市のまちづくりや取り組み>、<まちづくりを学ぶ方法>、<松山の歴史・文化>、<学生のまちづくり参加>といった【まちづくりの視点を獲得】していった。

#### (b) プロジェクト胎動期

プロジェクト胎動期は、取り組みたいまちづくり活動を模索しながら、仲間づくりを行う期間である。

受講生自身が取り組みたいまちづくりを発表し、他受講生との意見交換をすることで、<まちづくりへの興味>や<学びの意欲>が喚起されることや、<他者の視点>を通して再考するなど、【まちへの思いを逡巡】させていった。

実際に【仲間づくり】をするにあたっては、<他受講生への共感>や<他受講生への共感>をすることや、<協働意欲>の芽生え、<多様な考え方>に触れること、自身の<興味関心の変化>があった。

#### (c) プロジェクト実践期

プロジェクト実践期は、グループ毎にまちづくり活動の目的や方法を模索しながら、地域の実情を知ることや関係主体との協働、実践に向けた準備を経て、活動を実践していく期間である。

【まちづくりの目的】においては、<目的の立て方>を考えると<誰のための活動か><自分たちの伝え

たいこと>を模索すること、<当初の思い>を振り返ること、<目的の再確認>を行っていった。

【まちづくりの方法】においては、プロジェクトの<実現可能性>を考えると<地域に即した方法>の模索、<地域のニーズを知る方法>を考えていった。また、まちづくりを<進める方法がわからない>といった状況が生まれ、【活動が停滞】したが、<やるべきことが明確化>することにより、停滞を脱却していった。

【まちづくり活動の目的と方法の往還】においては、<やりたいこととニーズのバランス>をはかることや<やりたいことを絞る基準>を作っていく、プロジェクトを具体化させていった。他方で、<決断の難しさ>のために【活動が停滞】し、<時間に追われて(プロジェクトを)決定>していった様子も見受けられた。

【グループ活動】においては、<情報共有の仕方>や<役割分担の重要性>、<他グループの活動>の仕方、<日程調整の難しさ>を学んだり感じたりしながら、<メンバーとの協働意欲>が強まることや<メンバーの参加意識の差>を感じていったりした。<合意形成の難しさ>や<全員が集まる機会がない>、<中心人物の不在>という状況が、【活動の停滞】につながったが、<参加できるメンバーでの活動>に切り替えることや<他メンバーへの動機付け>をすることにより、活動を進めていった。

【地域の実情】においては、<地域の歴史>や<地域の現状・計画・展望>、<地域住民の思い>を学んだり触れたりしながら、受講生自身も地域で様々な<実際の体験>をしたり、<地域の良さの発見・再発見>をしていった。

【関係主体との協働】においては、<やりとりの仕方>や<許可の取り方>を学んだり、<地元まちづくり関係者の思い>や<立場による思い・考えの違い>に触れたりした。また、その中で他の関係主体を紹介してもらうなど<新たなつながりの形成>がおこなわれた。受講生自身は、そのような関係主体との関わりの中で、<よそ者としての関わり方>を模索していった。

【実践に向けた準備】においては、<様々な関係者との情報共有の仕方>や<リハーサルの大切さ>、<資金の管理>について学んだ。また、<情報発信の難しさ>や<直前の準備の忙しさ>を感じた。

上記のような過程を経て、プロジェクトを実践することで【実践による実感】を得ている。<計画通りに実施する難しさ>や<準備不足の実感>、<他者の協力の必要性>といったことから、<参加者・関係者の満足度>や<活動の効果>、<やりがいの実感>を感じている。

また、<スタッフとしての心構え>や<イベントの方法>について【課題・改善点を発見】した。



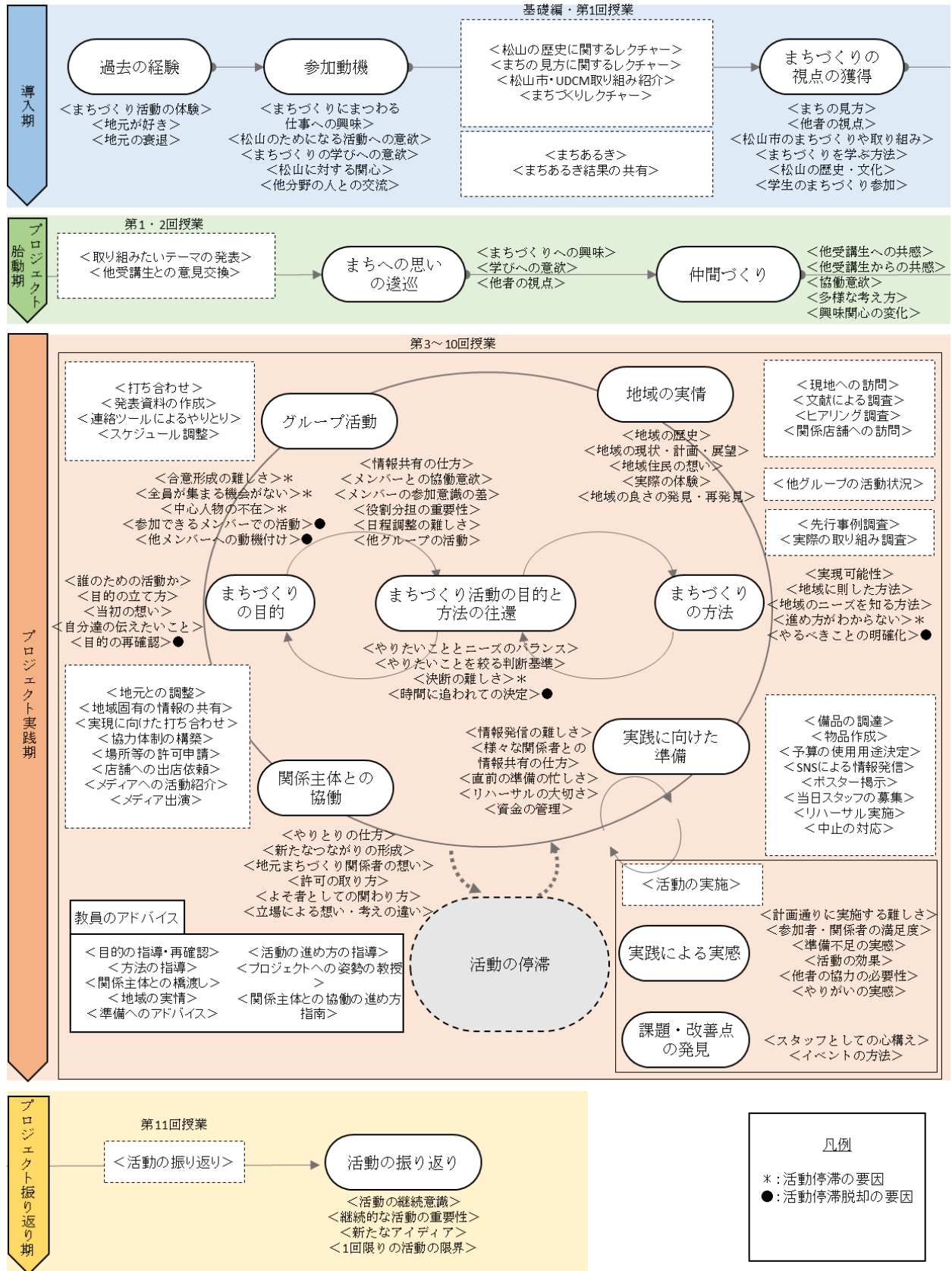


図-1 学びのプロセスモデル

(d) プロジェクト振り返り期

プロジェクト振り返り期は、活動を終え、活動の内容や自身について振り返る期間である。

【活動の振り返り】においては、＜活動の継続意識＞が芽生えることや＜新たなアイデア＞の着想を得ること、＜継続的な活動の重要性＞や＜1回限りの活動の限界＞を感じた。

(2) 第二の自我としてのまちづくりの担い手像

KH Coderによるクラスター分析により導出されたキーワードを図-2に示し、そのキーワードが使われた文脈に基づいて整理した、第二の自我としての理想のまちづくりの担い手像の8つの要素について表-5に示す。

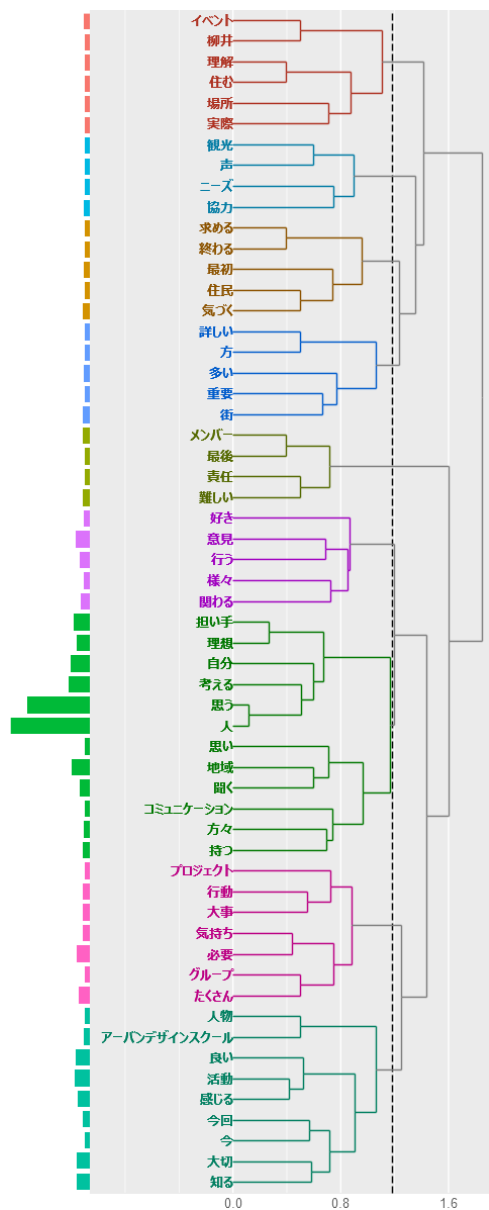


図-2 理想のまちづくり担い手像のクラスター分析結果

表-5 形成されたまちづくりの担い手像

no	キーワード	担い手像
1	イベント、理解、住む、場所、実際	地域住民に寄り添う
2	観光、声、ニーズ、協力	メンバーや他主体との連携
3	求める、終わる、最初、住民、気づく	継続性
4	詳しい、方、多い、重要、街	地域の実情に精通している
5	メンバー、最後、責任、難しい	最後までやり遂げる
6	好き、意見、行う、様々、関わる	地域愛着
7	思い、地域、聞く、コミュニケーション、方々、持つ	コミュニケーション
8	プロジェクト、行動、大事、気持ち、必要、グループ、たくさん	まちづくりへの意志、行動力

(3) 第二の自我を形成する学び

形成された第二の自我ごとに、それぞれの学びの内容を経ている受講生全体 (N=25) の割合と、クラスターに該当する受講生の割合を比較したものを図-3に示す。図中の灰色の折れ線グラフが受講生全体の割合を、橙色の折れ線グラフがクラスターに該当する受講生の割合をそれぞれ表している。

5. 考察

(1) 担い手像の形成における特徴的な学び

各クラスター毎に、受講生全体の割合に比較して大きい学びの内容を、クラスターの特徴的な学びとし、形成された担い手像にどのように影響したのかを考察する。

① 「地域住民に寄り添う」

【まちづくりの目的】における＜誰のための活動か＞と【地域の実情】における＜地域住民の思い＞、【実践による実感】における＜参加者の満足度＞が特徴的であった。誰のための活動なのかを考えながら、地域の実情を把握する上で地域住民の想いを知り、実践することで参加者の満足度を感じるにより、地域住民へ寄り添うことが重要であるという意識が醸成されると考えられる。

② 「メンバーや関係主体との連携」

【グループ活動】における＜メンバーとの協働意欲＞と＜役割分担の重要性＞、【実践による実感】における＜他者の協力の必要性＞が特徴的であった。メンバー内での協働に向けた意欲が高い中で、役割分担の重要性を



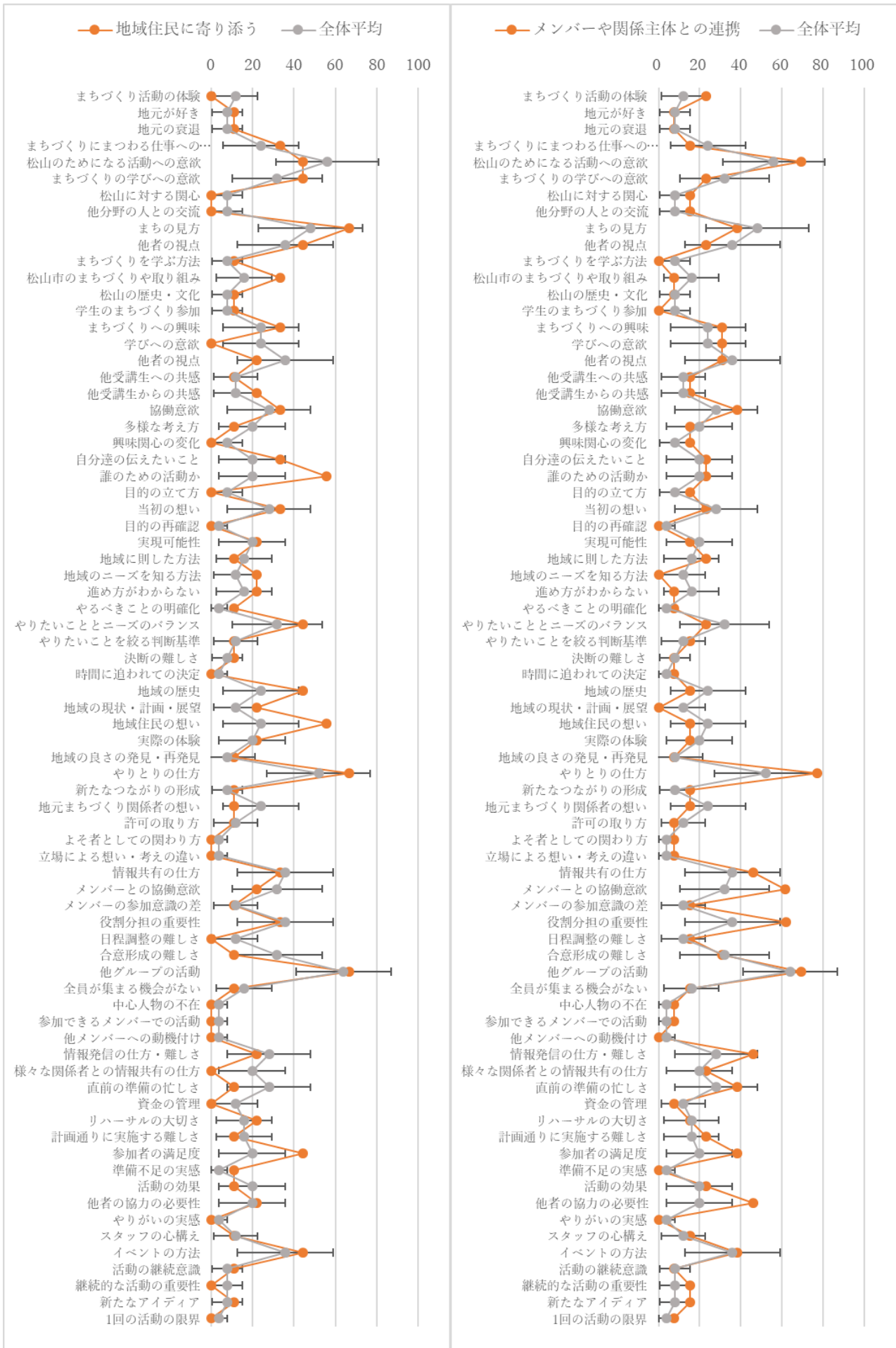
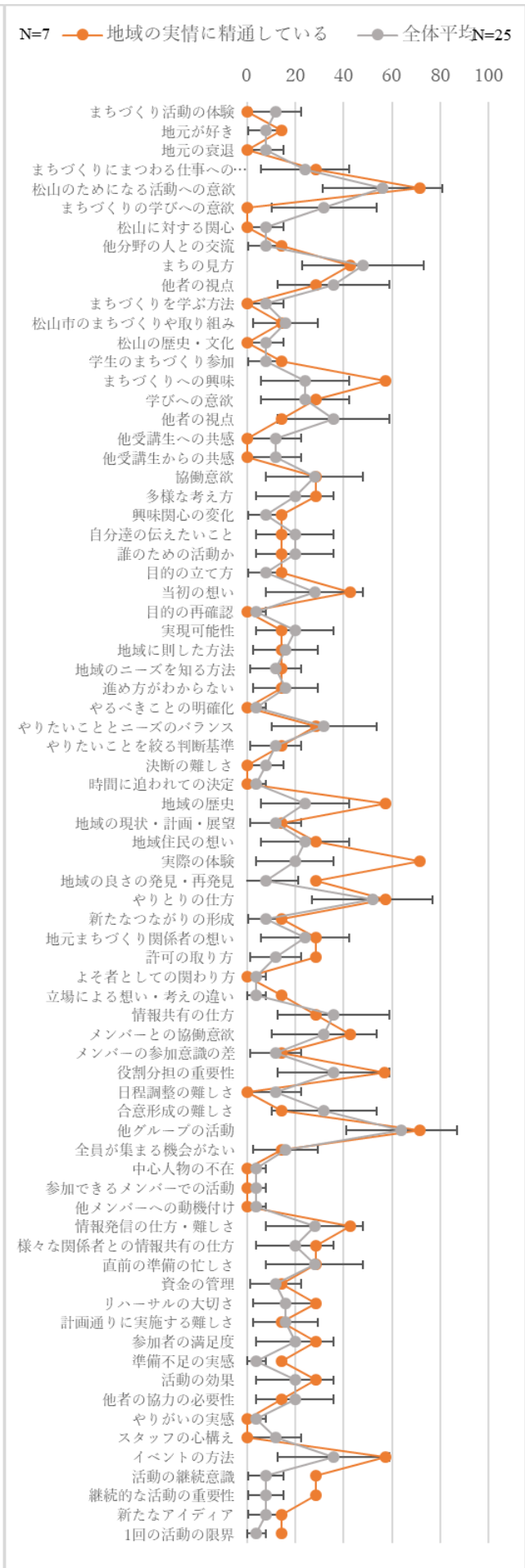
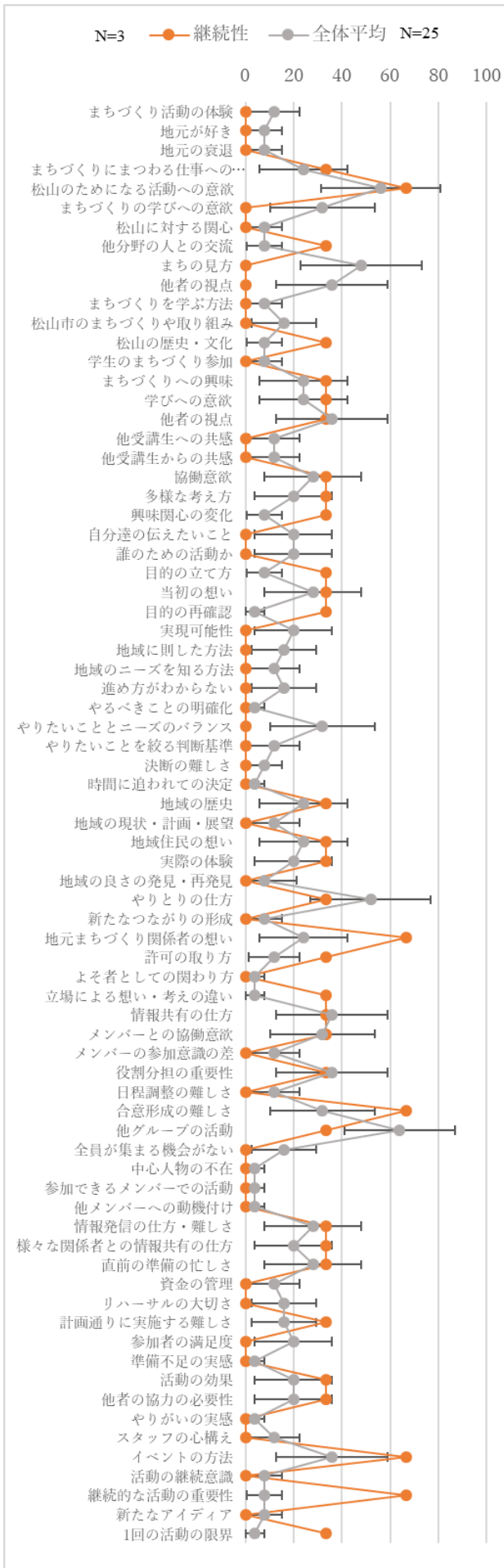
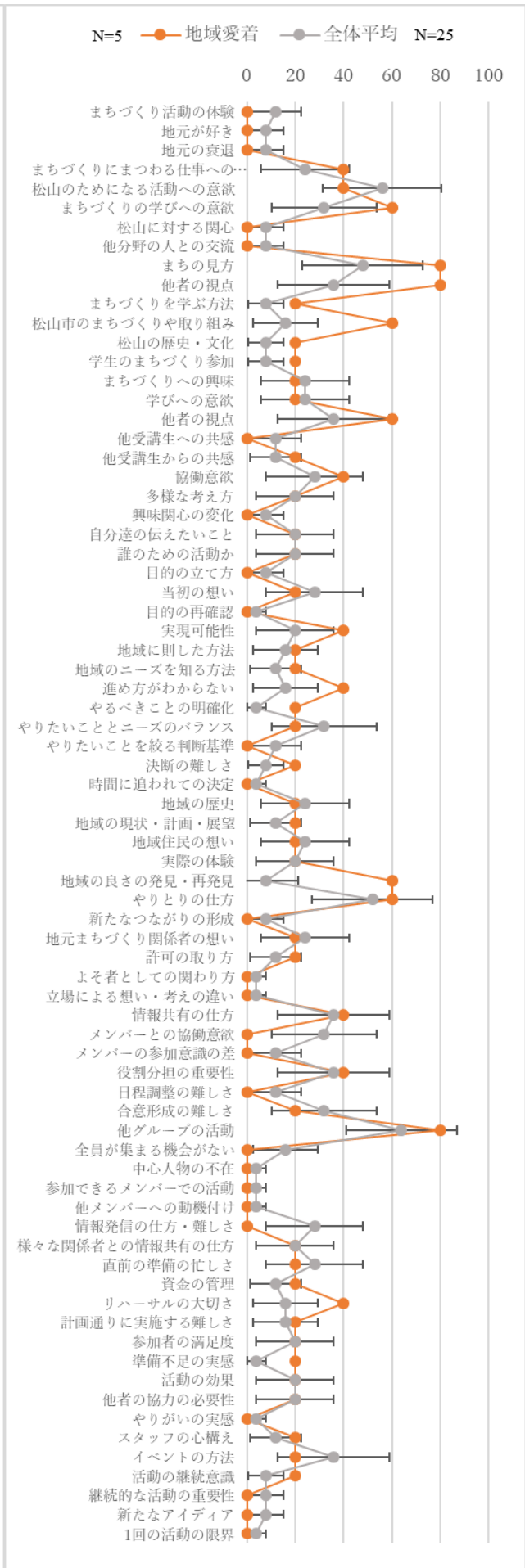
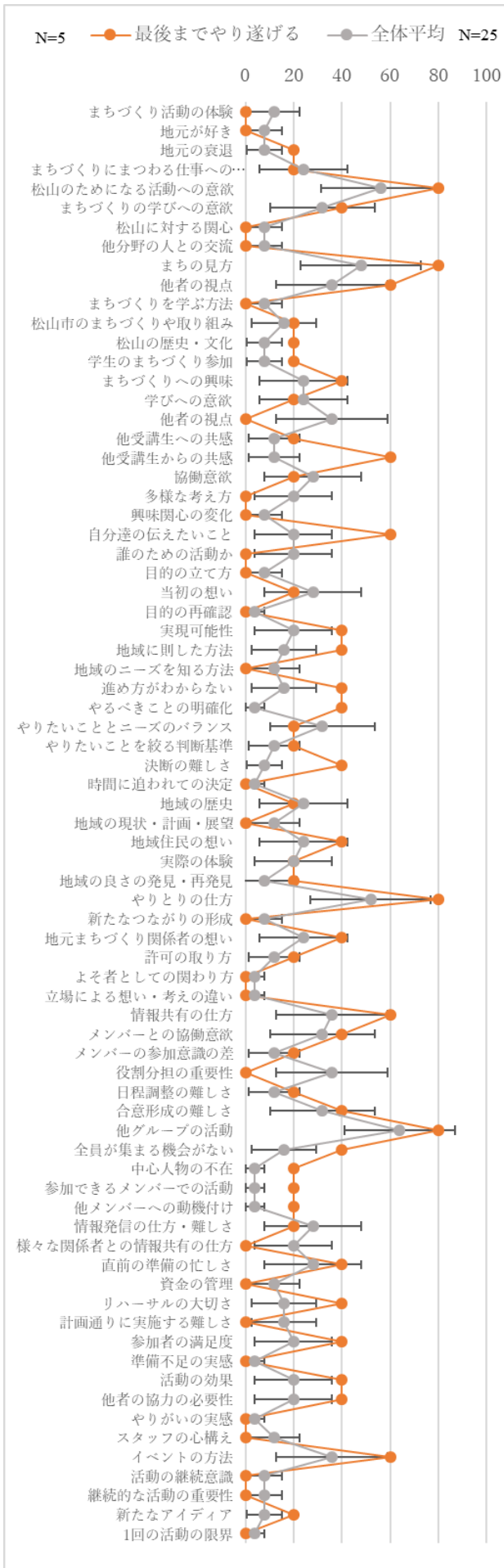
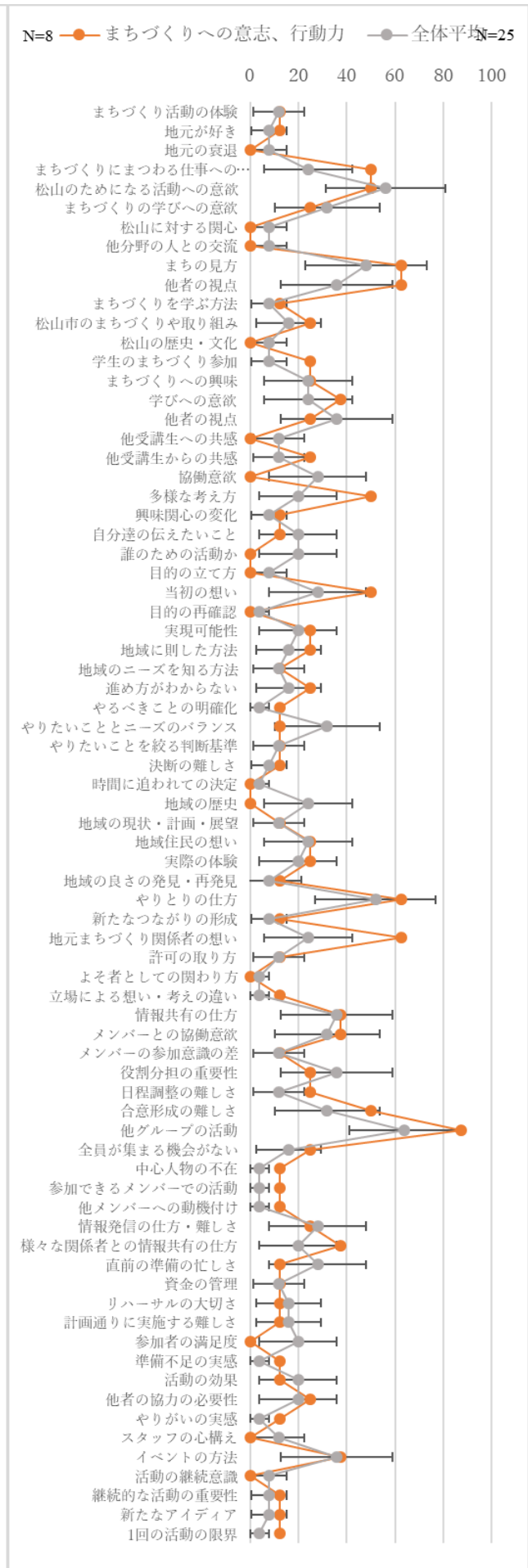
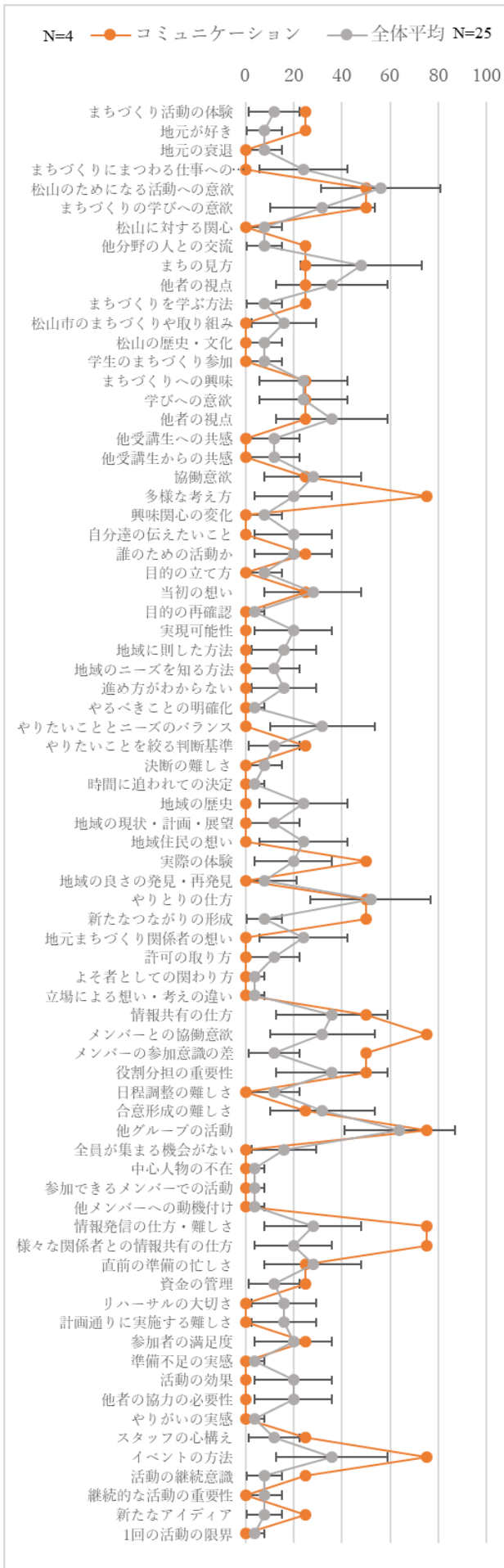


図-3 クラスター別の全体との比較









学びながら実践を行い、他者の協力の必要性を感じることで、メンバーや関係主体との連携が重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ③ 「継続性」

【関係主体との共同】における〈地元まちづくり関係者の思い〉と【グループ活動】における〈合意形成の難しさ〉、【活動の継続意識】における〈継続的な活動の重要性〉が特徴的であった。グループ活動の中で合意形成の難しさを感じながら、関係主体と協働する中で、地元まちづくり関係者の思いに触れ、活動を振り返る中で、継続的な活動の重要性を認知することにより、まちづくり活動における継続性が重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ④ 「地域の実情に精通している」

【まちへの思いの逡巡】における〈まちづくりへの興味〉と【地域の実情】における〈地域の歴史〉、〈実際の体験〉が特徴的であった。自身の中でまちづくりへの興味を深めながら、地域の歴史を知ることや実際の体験を通して地域の実情を把握していくことにより、地域の実情に精通していることが重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ⑤ 「最後までやり遂げる」

【仲間づくり】における〈他受講生からの共感〉と【まちづくりの目的】における〈自分たちの伝えたいこと〉、【まちづくり活動の目的と方法の往還】における〈決断の難しさ〉、【活動の停滞】における〈全員が集まる機会がない〉、〈中心人物の不在〉が特徴的であった。他受講生からの共感を得てグループを結成し、自分たちの伝えたいこと（目的）は何かを模索しながら、方法との間でなかなか決断できず、活動が停滞に陥る様子が見受けられた。そのような中で、実践をやり遂げたことにより、まちづくり活動において最後までやり遂げることが重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ⑥ 「地域愛着」

【まちづくりの視点の獲得】における〈他者の視点〉と〈松山市のまちづくりや取り組み〉、【地域の実情】における〈地域の良さの発見・再発見〉が特徴的であった。地域やまちづくりに対する他者の視点や、松山市のまちづくりや取り組みについて新たに知りながら、活動の中で地域の良さの発見・再発見をすることにより、地域愛着が重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ⑦ 「コミュニケーション」

【仲間づくり】における〈多様な考え方〉と【関係主体との協働】における〈新たなつながりの形成〉、【実践に向けた準備】における〈様々な関係者との情報共有の仕方〉が特徴的であった。仲間づくりの中で多様な考え方を知り、関係主体と新たなつながりを形成することや様々な関係者との情報共有の仕方を学んでいくなかで、コミュニケーションが重要であるという意識が醸成されると考えられる。

### ⑧ 「まちづくりへの意志、行動力」

【参加動機】における〈まちづくりにまつわる仕事への興味〉と【仲間づくり】における〈多様な考え方〉、【関係主体との協働】における〈地元まちづくり関係者の思い〉が特徴的であった。まちづくりにまつわる仕事への興味を持って受講し、他受講生の多様な考え方や地元まちづくり関係者の思いを知ることにより、まちづくりへの意志や行動力が重要であるという意識が醸成されると考えられる。

## (2) まちづくり学習への示唆

まちづくり学習において、まちづくり活動の実践をプログラムに組み込む場合、教員のサポートが重要であると考えられる。特に、対象者がまちづくりの経験を多く有していない場合、多少なりとも活動が停滞する時期を経る可能性が考えられる。今回、活動が停滞する要因と考えられるものの中に、〈決断の難しさ〉や〈進め方がわからない〉といったものがあった。西村ら<sup>20)</sup>は中山間地域における地域支援員事業の活動実態の把握を試みている。その中で、地域支援員の活動における意識について、「サポーター（地域支援員）自身に求められていることや『活動が正解かわからない』などが『困難な点』として多く挙げられ」ていたと報告されている。実際のまちづくり現場においても感じられている問題に対して、まちづくりの初学者で構成されたチームだけで乗り越えていくことは簡単ではないといえる。活動が停滞している間にも学びを得る可能性はあるものの、今回の調査結果からは活動を進めている中でこそ、様々な学びが生起していた。そのような中で、活動を停滞させずに前に進めていくことや、活動が停滞している場合に停滞期を脱却していく上では、熟達者としての教員のサポートが求められる。

本研究では、活動の停滞から脱却する要因として、活動の〈目的を再確認〉することや〈やるべきことの明確化〉、〈参加できるメンバーでの活動〉、〈他メンバーへの動機づけ〉、〈時間に追われての決定〉が確認された。今回、受講生の学びに着目しており、教員のサポート内容やサポートにおける意識との関連に関しては、把握できていない。他方で、まちづくりの初学者にとって、

「まず何から考えていけばいいのか」「どのように決めていけばいいのか」「実際に形にするにはどのような方法があるのか」ということに対して、どうすればいいのか分からない場合が多いと考えられる。そうした中、活動が停滞している際には、どういうまちづくりに興味を持っているのかを再確認させる、もしくは目的の立て方についてサポートすることや、その目的に沿った方法をどのように考えていくかを支援することが効果的であると考えられる。

## 6. おわりに

本研究において、従来十分に検討されてこなかった「まちづくりを学ぶ」という点において、まちづくり活動の実践段階を踏まえた「学びのプロセス」モデルを整理することができたことにより、とりわけまちづくりの初学者に対するまちづくり学習プログラムを設計する上での視点を提供することが期待される

また、どのような学びが理想のまちづくりの担い手像を形成し得るのかを示すことにより、各地域において求められる担い手にどのような経験・学びを促すことが重要であるのかという視点を示すことができた。

他方で、本プロセスモデルは一事例より作成したものであり、他事例と照らし合わせた上で妥当性の検証が必要である。

**謝辞：**インタビュー調査にあたって、UDSM1 期生の方々に多大なご協力を頂いた。ここに記して感謝いたします。

## 参考文献

- 1) まちづくり活動の担い手のあり方についてとりまとめ, 2017.10.
- 2) 田代久美, 細田洋子, 関口美恵子, 渡邊裕生, 佐藤慎也, 馬場たまき, 米倉雅真: まち探検型学習プログラムの効果的活用に関する研究—「堤町まちかど博物館・堤焼佐大ギャラリー」の設立を事例として—, 学術講演梗概集 E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, pp.779-780, 2002.
- 3) 谷口博文: 地域の公共政策を担う人材育成プログラムの研究—交通・まちづくり政策に関する政策提言の事例を中心に—, 都市政策研究, No.12, pp.45-60, 2011.
- 4) 脇田祥尚, 黒谷靖雄, 田中隆一: 参加のまちづくりの学習プログラムに関する研究—松江まちづくり塾を事例として—, 都市計画. 別冊, 都市計画論文集, No.37, pp.871-876, 2002.
- 5) 地域の自立とまちづくりを担う人材育成調査報告書,

- 2005.3.
- 6) 安藤真理: 子どもを対象とした「まちづくり学習」の展開の可能性に関する研究—横浜市の事例を通して—, 「住まい・まち学習」実践報告・論文集, No.5, pp.109-114, 2004.
- 7) 梶島邦江, 梅澤隆: こどものまちづくり学習教材としての「まちの謎解きブック」の有用性に関する研究, 都市計画. 別冊, 都市計画論文集, No.31, pp.163-168, 1996
- 8) 野澤千絵: 市民のためのまちづくり学習の効果と課題に関する研究—全国人口 1 万人以上の自治体主体のまちづくりリーダー・コーディネーター養成講座を対象に—, 都市計画論文集, No.40-3, pp.559-564, 2005.
- 9) 田坂亮, 和多治, 高見沢実: 小学校の総合的な学習の時間に組み込まれた「まちづくり教育」に関する研究—横浜市の小学校を対象とした調査を通して—, 都市計画論文集, No.38-3, pp.277-282, 2003.
- 10) 柳沼葉子, 市川健太, 岩倉成志, 野中康弘: 日本橋常盤小学校における「まちづくり学習」の授業効果の持続性—授業実施 5 年後のパネル調査—, 土木学会論文集 H(教育), Vol.69, No.1, pp.9-20, 2013.
- 11) 谷口綾子, 小林三千宏, 田中義晴, 平石浩之: モビリティ・マネジメント教育の長期的効果継続性に関する実証分析—モビリティ・マネジメント実施 3 年後の意識調査より—, 土木学会論文集 H(教育), Vol.2, pp.45-52, 2010.
- 12) 松村暢彦: 小学生を対象とした道路と地域の工業の関連性に関する学習プログラムの開発と実践, 土木学会論文集 H (教育), No.2pp.53-61, 2010.
- 13) 脇田祥尚, 森本純一: 歴史的市街地における小学生のためのまちづくり教育—「空堀子どもまちづくり」を事例として—, 日本建築学会技術報告集, Vol.18, No.39, pp.715-720, 2012.
- 14) 毛利洋子, 星野裕司, 小林一郎, 永村景子: 大学での少人数教育を契機とした景観まちづくりの実践, 土木計画学研究・論文集, vol.24, No.2, pp.381-388, 2007.
- 15) 本田豊, 後藤正明, 樋口一雄: 実践的まちづくり支援を通じた実務者育成の新たな試み, 実践政策学, Vol.3, No.2, pp.125-136, 2017.
- 16) 小杉学, 延藤安弘: 「フィールドセミナー」によるまちづくり教育のプロセス評価—大学におけるまちづくり演習を事例として—, 日本建築学会技術報告集, No.17, pp.459-654, 2003.
- 17) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 弘文社, 1999.
- 18) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, 弘文社, 2003.
- 19) 西村奈弓, 柴田祐, 澤木昌典: 中山間地域における地域支援員事業の活動実態と今後の課題に関する研究—兵庫県小規模集落サポーター派遣事業及び丹波市地域づくり

事業を事例として一，都市計画論文集，No.47-3，pp.973-978，2012.

( . . . 受付)

STUDY ON THE LEARNING PROCESS IN TRAINING PROJECT FOR TOWN  
MANAGEMENT LEADERS  
-A CASE OF MATSUYAMA URBAN DESIGN SCHOOL -

Naofumi OGAWA, Tsuyoshi HATORI, Shin OSAKI and Yuka KATAOKA

The present study was aimed at theoretical generation of students of the learning process in educational program of town planning leader. On to continue to expand the urban development of the city residents, it is a pressing issue in the region to foster the leaders of the town development. Although many local governments are provided their own educational program, a program that has been developed taking into account the "learning town development" process of learning of the students themselves are not many. Therefore, to target the students of which are addressed from 2014 November in Matsuyama, Ehime Prefecture "town development Educational School Business (Urban Design School)", it was conducted an interview survey. The interview analysis, grounded theory approach adopted, was to create a model of the process of learning of the leaders of the town planning.